

ヨエル書とラオディキアのセブンスデー・アドベ ンチスト教会 - 第26号

Jeff Pippenger

2026-01-12

第26番

ヨエルの四世代は、1863年から日曜法に至るまで、神のぶどう園が段階的に破壊されていくことを表している。四という数はまた、キリストの品性の四つの特質を象徴する。聖所のケルビムは四つの顔を持ち、その姿は、古代イスラエルが聖所の周りに宿営した際の、四つに区分された配置と一致している。彼らはまた四福音書を表している。

彼らの顔の形について言えば、四つとも人の顔を持ち、右側には獅子の顔、左側には牛の顔を持ち、また四つとも鷲の顔も持っていた。エゼキエル書 1:10

第一の獣は獅子のようであり、第二の獣は子牛のようであり、第三の獣は人のような顔をしており、第四の獣は飛ぶ鷲のようであった。黙示録 4:7。

聖書（民数記2章）は、12部族（幕屋のすぐ周りに宿営したレビ族を除く）が、三部族ずつからなる四つの宿営に編成され、聖所の周囲の東西南北に配置され、それぞれ標章、すなわち旗または軍旗の下に置かれていたと記している。この配置は象徴的な対応を生み、地上の宿営がケルビムに守られた天の御座を映し出すものとなった。

ユダは聖所の入口で、日の出の方角である東を向いていた。ユダの旗印は獅子であり、それはユダ族の獅子を表しているからである。ユダと共にいた二つの部族はイサカルとゼブルンであった。ヨハネの幻では、第一の獣は獅子のようであり、同様にエゼキエルのケルビムも獅子の顔を持っていた。人を象徴するルベンは南にいて、シメオンとガドが共にいた。西にはエフライムがいて、ベニヤミンとマナセと共に、牛で表されていた。北にはダンがいて、アシェルとナフタリと共に、鷲で表されていた。天の聖所の四つの顔と部族の関係は、四つの福音書に表されている。

マタイはユダ族の獅子、マルコはいけにえの雄牛、ルカは人、そしてヨハネは高く飛ぶ鷲である。ユダ族の獅子としてのキリストは、ご自身の預言の御言葉に封印をし、またその封印を解く方であると自らを示している。マタイの福音書には、メシア預言の成就についての直接的な言及が（12箇所）他の三つの福音書を合わせたものよりも多い。比べものにならない。

マタイによる福音書は、神の預言のことばを象徴している。医者であったルカは、人の子であるキリストの視点から福音書を記している。ルカは人の顔にあたるからである。マルコは、キリストが表すいけにえの側面から福音書を記しており、マルコは牛にあたる。ヨハネは高く飛ぶ鷲であり、彼の福音書において神の深遠な事柄を示した。

マタイによる福音書を、預言の御言葉の中で表されているとおりに理解することは重要である。マタイによる福音書は、ユダ族の獅子であり、預言の御言葉を司る方、秘められた事柄の不思議な数え手、不思議な言葉の達人、御言葉に封をし、また封を解く方であ

る。イエスはアルファでありオメガであり、御言葉である。新約聖書の最初の書と最後の書は、預言的な書である。黙示録についてこの事実を知っている人は多いが、マタイが新約聖書のアルファであることには気づいていないかもしれない。したがって、マタイは新約聖書のオメガと一致していなければならない。それは終わり、すなわち黙示録を表していなければならない。

したがって、創世記の第11章から第22章に示されている契約史の筋に並行する筋をマタイに見いだすとき、それはマタイの部族の獅子が封印を解いている真理にほかならない。創世記、マタイ、黙示録に表されている契約史の十二章は、いま封印が解かれつつあり、私たちが特定しているのは、マタイ23章が、ぶどう園のたとえにおける賢い者と愚かな者の分離を表しているということである。かつての契約の民に対する八つのわざわいは、救いの箱舟に乗り込む十四万四千人を表象する八人に預言的な対応がある。23章は、1844年10月22日に2300日が終わりに達したときに天の聖所で始まった働きの表象であり、間もなく来る日曜法において再びそうなる。23章はこの真理を示している。

第二十四章は、キリストが背教したイスラエルとの対話を終え、ユダヤの神殿を最後に去られた直後の出来事である。24という数は、古代イスラエルから現代イスラエルへの移行の象徴であり、マタイ二十四章でキリストがそのメッセージを示されたとき、まさにお立ちになっていた預言史の地点を指している。マタイ二十四章の預言的メッセージは、行に行を重ねる方法論の神的な例証であり、とりわけミラー派の歴史、ひいては十四万四千人の歴史を扱っている。24は、義の太陽の光を反射する月の上に立つ黙示録十二章の教会によって表されている。彼女の頭には24を象徴する十二の星があり、彼女は、古代イスラエルの十二部族が現代イスラエルの十二弟子となる、キリストの誕生に至るまでの歴史を表している。第二十四章には、1798年から大失望に至るまでのミラー派の歴史が表されている。続いてマタイ二十五章が来る。

二十五という数は、善であれ悪であれ、レビ人を象徴しているが、同じく重要なのは、それが賢いレビ人と悪しきレビ人の分離を表していることである。マタイ25章は、三人の証人、すなわち三つのたとえによって、二十五という数に表される分離の過程を立証している。もちろん、十人の乙女のたとえはミラー派の歴史を表し、また、十四万四千人の歴史も表している。この歴史は第一の天使の歴史であり、タラントのたとえは第二の天使を表し、羊とやぎのたとえは第三の天使の裁きである。

第26章から第28章は、過越祭の歴史から十字架刑後の福音宣教の使命に至るまでを取り上げている。

イエスはこれらのことばをすべて語り終えると、弟子たちに言われた。「あなたがたも知っているとおりに、二日後は過越の祭りで、人の子は引き渡されて十字架につけられる。」マタイ 26:1-2

第26章にあるさまざまな道標の要約は、まず3~5節のイエスを殺す計略から始まる。次に、6~13節ではベタニアでイエスが香油を注がれる。14~16節では、ユダが三十枚の銀貨でイエスを売り渡す。続いて、17~25節で弟子たちとともに過越の食事が行われる。26~29節ではイエスが主の晩餐を制定し、30節ではイエスがペテロの否認を予告する。36~46節では、イエスはゲツセマネにいる。47~56節ではイエスが逮捕され、さらに57~68節で

は、イエスはカヤパと最高法院の前に立たされる。69節以降では、ペテロがイエスを否認することが述べられる。この章には、終わりの日に繰り返される十の特定の道標が含まれている。

第二十七章にも、十の明確な出来事がある。イエスがピラトのもとに引き渡され、次にユダが首を吊り、その後イエスはピラトの前に連れて行かれ、次にバラバが選ばれ、ピラトはイエスを十字架につけるために引き渡し、次にイエスは嘲られ、次にイエスは十字架につけられ、次にイエスは息を引き取り、次にイエスは葬られ、最後に墓の番兵が証言する。

第28章には道標が三つしかない。最初は復活、次にサンヘドリンの偽り、そして大宣教命令である。十四万四千人の歴史の中で繰り返される十字架の二十三の明確な道標を持つ三つの章。

マタイによる福音書26章 - 十の道しるべ

1. 祭司長たちと長老たちによるイエス殺害の陰謀 (3-5節)
2. ベタニアでアラバスターの壺を持った女が香油を注ぐ (6-13節)
3. ユダは銀三十枚でイエスを裏切ること同意する (14-16節)
4. 弟子たちとともに過越の食事を準備し、食べる (17-25節)
5. 主の晩餐の制定 (26-29節)
6. ペテロの否認の予告 (30-35節)
7. ゲッセマネの苦悶 (36-46節)
8. イエスへの裏切りと逮捕 (47-56節)
9. カヤパと最高法院の前で裁判にかけられるイエス (57-68節)
10. ペテロの三度の否認 (69-75節)

マタイ27章 - 十の道しるべ

1. イエス、ピラトに引き渡される (1-2節)
2. ユダの後悔と自殺 (3-10節)
3. ピラトの前のイエス - ローマの正式な裁判 (11-14節)
4. イエスの代わりにバラバが選ばれる (15-26節)
5. ピラトはイエスを十字架につけるために引き渡す (バラバの釈放を含む)
6. 兵士たちによる嘲りと鞭打ち (27-31節)
7. 十字架刑 (32-44節)
8. イエスの死 (45-50節)
9. 超自然的なしるしとアリマタヤのヨセフによる埋葬 (51-61節)
10. 墓における番兵の配置 (62-66節)

マタイ28章 - 三つの道しるべ

1. 復活と空の墓 (1-10節)
2. 兵士たちに対する祭司長たちと長老たちの偽り (11-15節)
3. 大宣教命令 (16-20節)

ベタニアでの油注ぎから大宣教命令に至るまでのキリストの経験が、その地上での奉仕の終結と、諸国民への福音の始まりを画したように、同じ道標が、神の残りの民が恩恵期間の終わり、最終的な勝利に近づくにつれて、その経験の中でも繰り返される。

第26章から第28章は、23のそれぞれ異なる道標に基づいて構成された過越の歴史を示しており、これらの道標は日曜法の前後の歴史の中で繰り返される。

私たちの大祭司であるキリストが聖所の清めのために至聖所に入られること（ダニエル書8章14節に示されている）、人の子が「日の老いたる者」のもとへ来られること（ダニエル書7章13節に示されている）、そして主がご自分の宮に来られること（マラキによって預言された）は、いずれも同じ出来事の描写である。また、これはマタイ25章の十人の乙女のたとえでキリストが語られた、花婿が婚礼に来ることによっても表されている。『大いなる論争』427。

1844年10月22日の二千三百日の終わりは、日曜法において再現される。マタイによる福音書の最後の三章にある23の道しるべは、神性と人性を結び合わせるために用いられる尊い血を指し示している。

天の聖所においてキリストが人間のために執り成しておられることは、十字架の上での彼の死と同様に、救いの計画にとって不可欠である。彼はその死によって、復活の後に天に昇って完成されるその働きを始められた。私たちは信仰によって垂幕の内に入り、「先駆者が私たちのために入られた」ところへ。ヘブル6:20。そこではカルバリーの十字架の光が反映している。そこで私たちは、贖いの神秘について、より明確な洞察を得ることができる。人の救いは、天にとって無限の代価を払って成し遂げられた。捧げられた犠牲は、破られた神の律法が課す最大限の要求に完全にならなっている。イエスは御父の御座への道を開かれ、その執り成しを通して、信仰をもって彼のもとに来るすべての人の真実な願いは神の御前に差し出されう。『大いなる争い』、489。

マタイによる福音書23章は、偽りの祭司職に対する断罪を強調している。26章から28章は23章に対するオメガに当たる。偽りのレビ人、すなわち老人たちの四世代にわたって激化した反逆が、最後の三章における道標を生み出した。

第二十四章は、一つ一つ積み重ねる方法論をキリストの方法論だと見なし、キリストがエルサレムの滅亡を用いて、今ある事柄、かつてあった事柄、そしてこれから起こる事柄を述べていることを示している。

紀元70年のエルサレム陥落は、エルサレムがネブカドネザルによって最初に破壊されたのと同じ日付に起こった。ネブカドネザルによるエルサレムの破壊は過去の出来事であり、キリストの歴史において、ティトウスがエルサレムを攻略した出来事は世の終わりを予表した。マタイ24章は行に行を重ねる方法論を強調しており、これによって「方法論」を預言的証言の要素として特定している。

24章において、キリストは、預言者ダニエルが語った「荒らす憎むべきもの」を理解する必要性を示しており、それはまさにウィリアム・ミラーの基礎的理解であり、ダニエル書の幻を確立する象徴でもある。また、それは、アドベンティズムがダニエル書の「the daily」に関するミラー派の理解を拒否し、その結果、テサロニケ人への第二の手紙2章の強い惑わしに与ったことによる反逆をも表している。この章はルカ21章と直接つながっており、これによって1840年8月11日から1844年10月22日までが特定され、これは9/11から日曜法に至るまでを予表している。また、ルカ21章24節の「異邦人の時」とも結びついており、それはモーセの「七つの時」を解き明かす主要な鍵であると同時に、黙示録11章における神殿を測ることとも一致している。

第23章から始まり、第24章と第25章が続き、そして第26章から第27章で締めくくられる。二十三の道標を備えた三つの章は、第23章のアルファに対するオメガである。第26章に第27章と第28章を加えると「81」となり、それは祭司職の象徴である。三人の証人（創世記、マタイ、黙示録）に基づけば、第11章から第22章までは一本の線である。第23章から第28章までは、23で始まり23で終わる真理の線である。

マタイによる福音書の第1章から第10章は、同書にある三つの預言的系列の最初のものである。最初が十章、次が十二章、最後が六章から成る。霊感は、聖書のすべての書は黙示録において出会い、そこで終わると私たちに教えており、したがって、聖書のすべての書はマタイにおいても出会い、そこで終わる。ユダ族の獅子の顔としてのマタイは、十二の明確なメシア預言を示し、その十二の箇所がミラー派と十四万四千人の歴史の道標を形作る。黙示録がイエス・キリストの黙示で始まるように、マタイ第1章はイエス・キリストの黙示を提示し、それはモーセの生涯と証し、および反キリストの歴史と結びつつ、預言者・祭司・王によって表される勝利の教会の三要素を明らかにしている。

マタイは、神に選ばれた民との契約という文脈の中で、イエス・キリストの啓示から始まる。アブラハムからダビデまでが十四代、ダビデからバビロン捕囚までが十四代、そしてバビロンからキリストまでがさらに十四代である。マタイにおけるキリストの系図はモーセと呼応している。というのも、モーセがアルファであり、キリストがオメガだからである。モーセの百二十年の生涯は、ノアの歴史における百二十年の猶予期間と対応している。それゆえ、ノアの契約は、選ばれた民の契約と結びついている。モーセの百二十年は四十年ずつの三つの期間を表しており、第一の四十年の終わりにはモーセがエジプト人を殺し、第二の四十年の終わりには長子、ファラオとその軍勢が殺された。第二の四十年の期間はカデシュでの反逆で終わり、第三の四十年の期間はカデシュでの第二の反逆で終わった。アルファの三つの預言的系列はいずれもカデシュで終わり、マタイの系図の三つの預言的系列はダビデ、バビロン捕囚、そして契約の使者で終わる。

モーセのアルファがキリストのオメガと一致すると、カデシュに関する六つの証拠が得られる。カデシュとは1863年と日曜法を指す。マタイの系図はダビデ王をカデシュに位置づけており、そこは背教的アドベンチズムがバビロンへ連れて行かれる場所であって、そのときキリストは十四万四千人との契約を堅くする。ダビデを日曜法の時点に置くことによって、ダビデに関する第二の証拠が確立される。ダビデは、三十歳で奉仕を始めた三人の人間の代表の一人である。キリスト、ダビデ、ヨセフ、エゼキエルはいずれも三十歳でその働きを始めた。三十歳で奉仕を始めたこの四者は、教会が戦う教会から勝利の教会

へと変えられるとき、神性と人性の結合を表している。その教会は、預言者、祭司、王から成っている。その変容は日曜法で印づけられ、そこはカデシュでもある。したがって、マタイの系図におけるダビデは三十歳のダビデと一致する。

準備の30年は、アブラハムの契約の430年と一致し、また祭司の年齢およびダニエル12章11節の1290年とも対応する。次の記事では、マタイの福音書の中にあるそれら十二のメシア預言を一つずつ検討する。まず、マタイの福音書の中に三つの預言的な流れを見出す。1～10章、次に11～22章、そして23～28章である。

1844年の失望の後しばらくの間、私は再臨運動の人々と同様に、憐れみの戸はその時、世界に対して永遠に閉ざされたのだと考えていた。私が最初の幻を授かる前に、この立場をとっていたのである。私に神から与えられた光こそが、私たちの誤りを正し、真の立場を見させてくれた。

私は今でも閉じ戸説の信奉者だが、当初私たちがその語を用いた意味でも、私の反対者たちが用いている意味でもない。

ノアの時代には閉ざされた戸があった。その時、洪水の水にのまれて滅びた罪深い人類から、神の霊が退かれた。神ご自身がノアにその「閉ざされた戸」のメッセージをお与えになった。「わたしの霊は、いつまでも人と争うことはない。人もまた肉にすぎないからである。しかし、人の齢は百二十年としよう」（創世記6:3）。

アブラハムの時代には、閉ざされた戸があった。ソドムの住民に対する慈悲の執り成しは絶え、ロトとその妻および二人の娘を除くすべての者が、天から下された火によって焼き尽くされた。

キリストの時代には、閉ざされた戸があった。神の御子は、その世代の不信仰なユダヤ人にこう宣言した。「あなたがたの家は、見捨てられて荒れ果てたままに残される」（マタイ 23:38）。

時の流れを終わりの日々にまで見通し、同じ無限の力はヨハネを通してこう宣言した。「聖なる方、まことの方、ダビデの鍵を持つ方、開ければだれも閉めることができず、閉めればだれも開けることができない方が、こう言われる。」（黙示録 3:7）

私は幻のうちに示され、今もなお、1844年には閉ざされた戸があったと信じている。第一と第二の天使のメッセージの光を見てその光を退けた者はみな、闇の中に残された。そして、それを受け入れ、天からのそのメッセージの宣べ伝えに伴った聖霊を受けていながら、その後信仰を捨て、自らの経験を迷妄だと断言した者は、そのことによって神の御霊を拒み、もはやその御霊は彼らに訴えかけることはなかった。

光を見なかった者には、それを拒んだという罪はなかった。神の御霊が及ぶことができなかつたのは、天からの光を侮った人々だけであった。そしてこの部類には、すでに述べたように、それが彼らに提示されたときにそのメッセージを受け入れることを拒んだ者と、一度受け入れたのちに信仰を捨てた者の双方が含まれていた。彼らは敬虔の形をもち、キリストの弟子であると公言しているかもしれない。しかし、神との生きた結びつきがないため、サタンの惑わしに捕らえられてしまうのである。幻の中に示されているのは、この二つの部類である-自分たちが従ってきた光を惑わしだと

宣言した者たちと、その光を拒んだゆえに神に拒まれた世の悪しき者たちである。光を見なかったためにそれを拒んだ罪を負わない者たちについては、何の言及もなされてない。Selected Messages, book 1, 62, 63.

贖罪の大いなるわざにおいて信仰によってイエスに従う者こそが、彼らのための御自身の執りなしの恩恵を受けるのであり、この奉仕の働きを明らかにする光を退ける者は、そのことによって恩恵にあずかることはない。キリストの最初の来臨の際に与えられた光を退け、彼を世の救い主として信じることを拒んだユダヤ人は、彼によって赦しを受けることができなかった。イエスが昇天し、弟子たちの上に御自分の執りなしの祝福を注ぐため、みずからの血をもって天の聖所に入られたとき、ユダヤ人は全くの暗闇に取り残され、無益ないけにえと供え物を続けた。型と影の奉仕は終わっていた。かつて人々が神に近づくために用いていたその戸は、もはや開かれていなかった。ユダヤ人は、その時ただひとつ彼を見だし得た道、すなわち天の聖所における奉仕を通して彼を求めることを拒んだ。ゆえに彼らは神との交わりを得なかった。彼らにとってその戸は閉じられていた。彼らは、キリストが真のいけにえであり、神のみ前における唯一の仲保者であることを知らなかった。ゆえに、彼の執りなしの恩恵を受けることができなかった。

不信仰なユダヤ人の状態は、私たちのあわれみ深い大祭司の働きについてわざと知らうとしない、キリスト者であると公言する者たちの中の無頓着で不信仰な者の状態を示している。型の儀式においては、大祭司が至聖所に入るとき、イスラエルのすべての者は聖所の周りに集まり、最も厳粛な態度で神の前に心を深くへりくだらせて、罪の赦しを受け、会衆から断たれることのないようにしなければならなかった。ましてこの反型の贖いの日にあっては、私たちの大祭司の働きを理解し、私たちに求められている務めが何であるかを知ることが、どれほど不可欠であることか。

「人は、神が憐れみによって彼らに送られる警告を、何の咎めも受けずに退けることはできない。ノアの時代、天から世界に一つのメッセージが送られ、人々の救いはそのメッセージをどのように取り扱うかにかかっていた。彼らはその警告を退けたため、神の霊は罪に満ちた人類から取り去られ、彼らは洪水の水の中で滅びた。アブラハムの時代には、罪あるソドムの住民に対する憐れみはもはや取りなすことをやめ、ロトとその妻および二人の娘を除くすべてが、天から下された火によって焼き尽くされた。キリストの時代も同様である。神の御子は、その世代の不信のユダヤ人にこう宣言された。『あなたがたの家は見捨てられて荒れ果てるままに残される。』マタイ 23:38。終わりの日々を見通して、同じ無限の御力は、『救われるために真理への愛を受け入れなかった』者たちについて、次のように宣言しておられる。『このために、神は彼らに強い感らしを送り、彼らが偽りを信じるようにされる。それは、真理を信じず、不義を喜んだ者は皆、罪に定められるためである。』第二テサロニケ 2:10-12。彼らが御言葉の教えを拒むと、神はご自身の霊を取り去り、彼らの愛する欺きに彼らをゆだねられる。』『大いなる論争』430、431。